少年詩篇

佐伯一麦

新潮社

少年詩篇

佐伯一麦

新潮社

少年詩篇

著者　佐伯一麦
発行　1997. 8. 30

発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社新潮社　〒162-8711／東京都新宿区矢来町71
電話　編集部　03(3266)5411
　　読者係　03(3266)5111
振替00140-5-808
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
価格はカバーに表示してあります
©Kazumi Saeki 1997.　Printed in Japan
乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-381403-9　C0093

本体1600－

白髪の唄　古井由吉

老境に向う男たちの奇妙に明るい日常のなかの狂気と正気、夢と現の狭間に、過去から未来へと連なる生と死の表裏一体の姿をみきわめる。独自の世界を拓く長編小説。　本体一八四五円

童謡の天体　阪田寛夫

童謡は自然をうたい、永遠をみつめ、心をうつす魂のふるさと。「サッちゃん」の作家が万感の想いをこめて、時にユーモラスに語り尽す、心暖る童謡の七つの宇宙。　本体一七四八円

漂流物　車谷長吉

雇われた料理店の先輩青川は、ある日、行きずりに子を撲殺した話を語り始めた……書くことが唯一の救いとして書いた「静謐な狂気としての私小説」中短18編を収録。　本体一五五三円

水の面（おもて）　山本昌代

微かな空気のずれや、日常にあいた透明な亀裂を、揺るぎない言葉と鮮かな表現で紡ぎ出す、静かな六つの小宇宙。川端賞候補作「桜貝」等六編を収録する短編小説集。　本体一五五三円

インディヴィジュアル・プロジェクション　阿部和重

渋谷はいま戦争状態みたいだ！　元諜報員の青年映写技師が巻きこまれた、プルトニウムをめぐる闘争は暴走する。強烈な知的スリルで現代を挑発する傑作長編小説。　本体一三〇〇円

パラダイス・フラッツ　笙野頼子

他人の不幸が嬉しくて、覗き見だけが生き甲斐の、親切ごかしで監視する――そんな管理人につきまとわれるシングル女性の孤独な闘い。本邦初のストーカー小説。　本体一二〇〇円

表示の価格には消費税は含まれておりません。

恩寵の谷　立松和平

生野銀山からやってきた三人の若い坑夫は足尾の谷で大鉱脈を発見するが……。著者の曾祖父をモデルに、近代日本「富国」の礎、足尾銅山の歴史を鮮やかに描く巨篇。　本体二五〇〇円

峠の棲家　岡松和夫

ガンを病み明日をも知れない祖母が、ダムで埋没する山間の村に、大学生の孫を連れて帰る。生きることの不思議さを時代を超えて描いて感動を呼ぶ長編小説！　本体一七〇〇円

バンブダンプ　田中小実昌

チョージ軍曹にいきなりジョージって名前にされてしまったばく。朝鮮戦争のさなか横田基地のバンブダン置場で過した奇態な日々を軽妙に描く自伝的小説。　本体一四〇〇円

聖母の鏡　原田康子

男・スペイン人、55歳の農夫。女・日本人、59歳。女が死に場所に選んだスペインで出会い、魅かれあう二人――老いを前にした人間の愛の姿をアンダルシアを舞台に描く。　本体一八〇〇円

赤い唇黒い髪　河野多恵子

愛らしい孫娘の唇に思わず魅入られてしまう初老の女の心の揺れを捉えた「赤い唇」を初め、心と躰の奥底にひそむ官能を円熟の筆で裁りとる七篇。五年ぶりの作品集。　本体一九〇〇円

輪廻の暦　萩原葉子

かつて父と自分を捨てた母の出現によって、嵐のような日々が始まった。朔太郎の娘の悲惨を描いた衝撃作「蕁麻の家」から二十年。著者畢生の自伝小説、遂に完結！　本体一三〇〇円

表示の価格には消費税は含まれておりません。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

藤村のパリ　河盛好蔵

人間虚子　倉橋羊村

監獄裏の詩人たち　伊藤信吉

すばらしい新世界　田村隆一

貴種と転生・中上健次　四方田犬彦

花から花へ
—引用の神話 引用の現在—　高橋英夫

姪との背徳の恋から逃れるために渡仏した島崎藤村。そこで藤村の心は癒やされたのか——。パリの日本人との交流、世界大戦下という時代を背景にその足跡をたどる。　本体三二〇〇円

子規から「ホトトギス」を継承し、若き日には漱石と小説を書き競い、親友・碧梧桐をも論駁して、近代俳句の盟主となった虚子。その軌跡をたどる待望の評伝！　本体一九〇〇円

天下に名高き上州のからっ風が吹きすさぶ前橋監獄。その異域の一世紀に、詩人の心をゆさぶったものは何か——。十年の思いを込めて探り照射した渾身の書下ろし！　本体一八四五円

人間とは何か、まっとうな社会とは何か——いかに情報に暗いか、いま「われとわが身」に感動する老いた野蛮人は、鎌倉の地の果てより密やかにしめやかにささやく。　本体一六五〇円

古今東西のテクストと交配しつつ、先鋭的な現代性を突きつける中上文学を緻密に論じた『貴種と転生』（87年刊）を大増補・改訂。ついに完結した決定的作家論＝物語論。　本体二四二七円

始原、他者、トポスなどさまざまな角度から思索をめぐらし、『古事記』から西行、芭蕉、大江まで自在に語る——文学の根源である〈引用〉の本質を追求する画期的評論。　本体二二〇〇円

表示の価格には消費税は含まれておりません。

少年詩篇

目次

庭掃除……9
ぶどう酒……11
おすし……13
朝の練習……14
電球の紐……17
納豆坊や……21
こいのぼり……24
トンネル……25
体温計……31
村……38
水道管……42
橋の下……46
乞食……51

野良犬……54
倉庫……57
合流地……60
パッタ……68
青い毬……74
アカサタナ……81
一日入学……84
花壇……85
給食……87
おおかみ……89
烏瓜……95
毛マリ……97
クロール……99

放課後……105
独楽屋……107
冬の原っぱ……114
かまくら……121
春の気配……125
水たまり……126
プリズム……134
取り直し……137
無人島……143
土器拾い……147
闘鶏……152
渓谷……155
カビ……161

ハワイ島……165
誕生会……167
草野球……174
カーブ……181
コックリさん……188
百合根……191
蜘蛛の巣アンテナ……202
洞……207
あとがき……210

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装画・挿絵……多田文昌
装幀……多田文昌／新潮社装幀室

少年詩篇

――父親というものは二つの生命をもっている。
自分の生命と息子の生命とだ

ルナール

庭掃除

かれはようやく歩けるようになったばかり。

落葉が舞う季節、板塀の手前に犬小屋がある庭の片隅で、草箒を持ち、庭土の表面を掃いている。胸ほどある箒にしがみつき、振り回されている。

落葉は掃き寄せられず、かえって掃き散らかされていくように見える。箒目が、てんでばらばらにつく。かれは一生懸命だ。

篠竹が植えてあり、縁側の近くには植木鉢が置いてある台がある。それとほ

ぼ同じ背丈のかれの歩き方は、両膝が触れ合っていて、心持ち内股かげんだ。青いサンダルが土を踏むたびに、キュッ、キュッと鳴る。

かれは、まだ赤ん坊の体つきの特徴を色濃く残している。真ン丸の頭が大きく重く、ともすると小石にも躓躓いて頭からつんのめりそうになる。

髪の毛は、母親の手で、額の上で一直線に切り揃えられてある、坊っちゃん刈りだ。揉み上げだけが少し長い。

額の下に、への字を几帳面に描いたような眉と、黒い瞳の表面に世界が撓んで映るつぶらな目。張っている頬が林檎のように赤い。下膨れの顔は、へこみが小さいピーナッツのようでもある。

もこもこと着膨れしたセーターにサロペット姿のかれが、父親手作りの把手が腰まであるちりとりを引きずるように運んだり、落葉を掃く仕草をするたびに、転ばぬかとはらはら見ている母親や親戚の大人たちから、

「上手だ、上手だ」

「めんこいっちゃねえ」

「しっかり掃いてけさいね」

「のめんすなよ」
と声があがる。
その大人たちの視線を、かれは充分に意識しはじめていた。
「――」
かれを呼ぶ声がする。
その声の方に、カメラを構えた父親の姿がある。
かれは、頭を少し右に傾げた半身の恰好で、箒の柄を腰の辺りで横に持って構え、得意げにポーズを取る。

ぶどう酒

目を覚ますと、周りを大人たちが取り囲んでいる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com